

平沢先生、いまお別れの言葉を告げようとしても、数々の想い出が連綿と去来し、何から申し上げてよいの心が乱れます。先生は、その実り豊かな生涯を閉じられる寸前にも、私に呼びかけて下さいました。

偶然というにはあまりにも痛恨きわまりなきことではありますが、去る十二月一日の深更、懸案の著作を脱稿した私は、この春以来、座右の書となっていた先生の金婚記念論文集『百日紅』（ひゃくじつこう）を改めて手にとり、先生の御友人や教え子にこんなにも慕われていた先生は無事終わったのだらうかとか、数多くの御友人や教え子にこんなにも慕われていた先生は本当にお幸せだと感じつつ、その『百日紅』をようやく書庫に収めたのでした。すると、その翌日、先生が今朝急逝されたとの報に接したのであります。先生と私とのあいだのこのドラマに、私は言葉もありませんでした。

想えばもう三十年以上もまえ、先生は深志高校三年三組の担任として、もっとも旺盛な教育者であられたその日々に、多感な私たちの人生の導き手であられたときから、つねに私たちの心の支えでありました。それも、いささか型破りの生徒に深い愛情を注がれ、また、大学受験や失恋などで失意のなかに落ちこんでいた生徒にたいして、教師としてよりも一個の友人として語り、慰め、そして明日への勇気を与えて下さった、先生はそういう方でした。どうして先生はそんなにも良き教師であられたのでしょうか。「真理は平凡なり」との言葉をくりかえし私たちにたたきこんで下さった先生は、御自身がいくたびか逆境をくりぬけてこられたにもかかわらず、つねに明るくい生一本の人生航路を歩まれてきたからだと思えます。そして私たちの卒業直後に清陵高校へ移られた先生は、担任のクラスのみならず深志高校第七回卒業生、すなわち七日会の全員を、また、広く深志の卒業生全員をわが教え子として、今日にいたるまで親しく御指導下されたのです。

私事にわたって恐縮ですが、先生は鎌ヶ崎高校教頭時代以来、しばしば私の講義の機会をつくって下され、そのたびに世界の動きをともに語りあって下さったのですが、こうして激動の時代のわが国のあり方への大局的な指針を仰ぐ機会も、もはや奪われてしまいました。ついこの夏の深志高校卒業三〇周年記念に際しては、懐しい松本平と鉢伏連山が望まれるお宅のテニスコートで一緒に過ごしたばかりなのに、いまとなっては、この夏の思い出も先生が私たちを最後にお招き下さった、いかにも先生らしい離別の冥だったのかと思わざるを得ません。先生は、その折にも、現在のお仕事である外語学園や松本大学予備校、松本第一高等学校を、これからの国際化時代にそなえてさらに発展させ、この松本の地に将来は音楽や外国語を通じて国際的な教育機関をつくりたいとの抱負を語っていられていました。先生のような開かれた精神とひたむきに奉仕するお心によってこそ、そのような壮大なビジョンも実現可能であろうと、私も心強く思ったばかりであります。それなのに、先生はいま突然と去られてしまいました。しかし、平沢先生、私たちは先生の御遺志を継いで、二十一世紀に向けてのより豊かな生存を求めつつ、明日の日本を支えてゆきたいと思えます。

先生が心から愛していらっしゃった奥様や肇君をはじめ御子様たち、遺族の皆様も、本当に素晴らしい「大平沢ファミリー」としてあとに残っております。

平沢先生、どうか、安らかにお眠り下さい。

昭和六十年十二月八日

松本深志高校第七回卒業生代表／東京外国語大学教授

中嶋 嶺 雄